鵜葺草葺不合命の誕生

古事記　上巻

其の後、海神の御女豊玉毘売命が御自身火遠理命の御許に参上して申されるのに、「わたくしは既に身重になつて居りましたが、もはや御産をする時になりました。考へて見まするに、天神の御子を海原の国にて御産み申すべきではありません。其れ故参上致しました」と申し上げられました。そこで、早速に其の海辺の波打際に産殿を御造りになり、鵜の羽を屋根に葺くことゝせられました。ところが、其の産殿の屋根を葺き終らないうちに、御腹の御痛みが堪へきれなく御

なりになつたので、其の産殿に御入りになりました。

いよいよ御産みにならうとする時に、豊玉姫命は其の夫の命に申されますのに、「総べて他の国の人は、御産をする時になりますと、其の本国の形姿に成つて御産をするものでございます。其れ故わたくしも生れた本国の形姿に成つて産みたいと思ひますから、どうぞわたくしの様子を御覧遊ばされないやうにして頂きたうございます」と申されたのであります。火遠理命は其の言葉を不審に思し召して、御産の真最中に、そつと隙見をして覗いて御覧になりましたところが、意外にも、八尋もある和邇の恰好をして、匍匐ひ動ごめいておいでになり

ましたので、之を見て驚き且つ恐れて、遁げ出しておしまひになりましたのであります。

豊玉姫命は、其の覗き見られたことを御知りになりまして、いかにも心恥しく思し召され、やがて其の御子を産み置いて、「わたくしは行くすゑ永く海の通路を往来して御目にかゝらうと思つて居りましたのに、わたくしの形姿を覗見遊ばしたのは、如何にも恥しいことでございます」と仰つしやつて、海神の国との堺をせき塞いで、海神の国へ帰つておしまひになりました。それで、其の御生れになりました御子の御名を、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命と申すのであります。

けれども、其の後、豊玉毘売命は、あのやうに覗見をなさいました御情を御怨みは申し上げながらも、なほ恋しさ懐しさに堪へられずして、御子を御養育申し上げる為めにといふので、其の御妹の玉依毘売命を御遣しになつて、次のやうな御歌を御言伝けになりました。其の御歌は、

赤玉は　緒さへ光れど　白玉の　君が装ひし　貴くありけり。

〔赤玉のやうな美しい御子は、其れを貫きつないでゐる緒さへ光る程に美しくはあらせられるけれども、其れにも増して、白玉のやうな我

が君さまの御容儀は、更に気高く貴く仰がれましたよ。さてもなつかしき我が君さま。〕

そこで、夫の君の御答へになりました御歌は、

沖つ鳥 鴨どく島に 我が率寝し 妹は忘れじ 世のことごとに。

〔澳に遊ぶ水鳥の鴨が著く彼の遠い海の中の島で、一しよにわたくしが寝たあなたの事をば、どうして忘れることが出来ませうか。世の有る限り、一生涯忘れることは出来ませぬ。〕

此の日子穂穂手見命は、高千穂宮に五百八十年御坐しました。そして其の御陵は、高千穂の山の西方に在ります。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『現代語訳古事記』植木直一郎 著